

# 経済学とは何か？

田中 史郎

私の専門は経済学だが、その専門領域の論文や講義ノートなどに関しては、その一部がホームページ\*に掲載されているので、それをご覧いただきたい。

\* <http://www.mgu.ac.jp/~stanaka>

それゆえ、ここでは経済学とは一体どのような学問なのかを共に考えることによって責務を果たしたい。

「経済学とは何か？」という「問い」に対しては、そのニュアンスの違いによって様々な「答え」がある。そこで、国際的な経済学者である関根友彦氏\*の近著『経済原論教科書』（三省堂書店、2004年）を参考にしつつ、この問いに答えることにしよう。

\*1923年東京都生まれ。

著書、The Dialectic of Capital. 2vols (Toshindo Press) 1984.1986.

Outline of the Dialectic of Capital. 2vols (Palgrave) 1997.

『経済学の方向転換』（東信堂）1995. など、多数。

## 1. 二つの「経済」

関根氏はまず「経済」という言葉の二重の意味を問う。その一つは「実物経済」であり、他の一つは「商品経済」という。

「実物経済」とは、人間社会が自然に働きかけて、有用なモノをつくりこれを使うことを意味する。人間社会と自然の物質代謝といってもよい。これは人間社会が発生して以来、つねに行われてきたことであり、これをしなければ人間社会は存在できない」という。それに対して「商品経済」とは以下のようなものとされる。「商品経済」とは、そういう実物経済を特に商品交換という形式あるいは様態を通して遂行する場合をいう。そこでは人間社会の生活に有用なものが、商品として生産され販売されるのが原則である。また商品として流通市場に現れた財貨は、貨幣によって購買された後に初めて消費される」と。

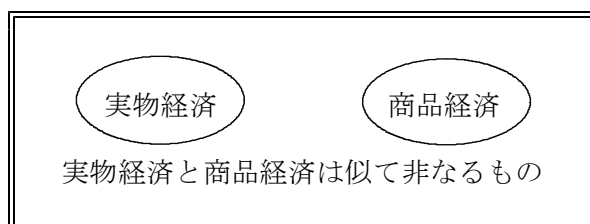
そして、この両者の関係を、「実物経済」は超歴史的（歴史貫通的）であるが、「商品経済」が全面的に行われるのは資本主義に特有な（つまり歴史的に特殊な）現象であると述べられる。

このようなことを初めて読む諸君にはやや難解に思われるかもしれないが、とりあえず先に進んでみよう。

「ところが商品経済にのみ特有な原理を一般化し、どんな人間にも「得を最大にし損を最小にしようとする性向」が備わっていると解釈すると、「経済」とは無駄を省き効率性を追求する人間の行為だと定義することもできる」。しかしこれは、「経済」の近代主義的解釈という」と。

この意味を分かって頂けるだろうか。「経済」の二つの意味を混同し、「商品経済」に

固有の論理を全てに当てはめる考えを「近代主義的解釈」といい、それに批判を浴びせているわけである。



では、このような混同はどうして起こるのか、この点に関して関根氏は以下のように述べる。

「経済学は、もともと近代社会（＝資本主義社会）の成立とともに形成された、という経緯がある。…当時の人たちは資本主義が一過性の歴史社会だとは知らず、あらゆる社会に共通な実物経済をことさら区別することができず、両者を混同したのであった。ところがこの素朴な混同がその後、社会科学の近代主義的伝統となって、今日まで根強く継承されてきている。」というわけだ。

つまり、こうした混同は一定の必然性をもった根深いものであり、十分に注意しなければならぬということであろう。

## 2. 商品経済の発生と貨幣、資本

さて、「経済」という用語にはこのように二つの意味があることを確認したが、この問題をやや異なった視点から考えよう。関根氏は以下のように述べている。

「商品交換はもともと共同体と共同体の間に発生した。それぞれ独立の実物経済を営んでいる共同体の内部から出てきたものではない。始めはそれらの隙間・間隙から出てきたものが、後から次第に共同体の内部にも浸透していった商品経済をつくる。」

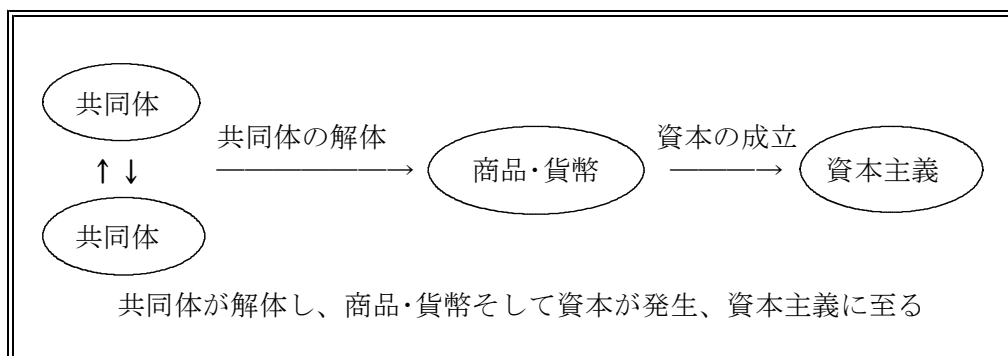
これだけでは分かりにくいので補足しよう。

人類の歴史が何時から始まったかは定かではないが、50-60万年前に遡ることはできるらしい。その時代から近代が開始されるまでは、人類は何らかの共同体の一員として生活をしてきたと考えられている。共同体の内では今日のような個人は存在せず、いわば全てが家族のような関係だった、と。そのような共同体内では、モノの交換はあったが、それは商品交換ではなかったといえる。今日では最後に残った共同体が家族だといわれるが、家族内でのモノのやりとりには対価を要求しないことを考えれば想像がつくだろう。

ところが、共同体と他の共同体とが接触し、そこに交換が始まると（最初の交換はおそらく沈黙交換だったといわれている）、相互に他人ゆえ対価を要求するようになり、そこから商品が発生したというわけである。

そして、この商品交換という関係が共同体内に浸透し、やがて共同体は解体し、家族という最小の共同体を除き、互いに他人である個人というものが誕生したといえる。長い時間を費やして商品経済は拡大していったといえる。

そして、商品交換が拡大すると事態は更に異なってくる。関根氏は次のように述べる。



「商品交換が盛んになると、必ず貨幣経済が発達し、資本家的な富の追求が生まれてくる」。「実物経済は、その社会が必要とし有用とみなす具体的な富を生産するシステムであるが、商品経済はそれを抽象的な富の追求という原理で運営するものである。消費者ならばどんなモノでも必要を満たせば飽き足りるが、資本家（資本の本性としての）は無限に商品経済的な富を求めて止まない」と。

そして、このように商品・貨幣から資本が成立し、その原理、つまり、「市場原理が実物経済をスッポリと包み込んだとき、我々は最も全面的な商品経済、すなわち資本主義経済を見ることが出来る」というわけである。

### 3. では、経済学って何？

これまで、第一に、実物経済と商品経済との関係を、第二に、商品・貨幣・資本に至る市場経済の展開を、簡略ながらみてきた。

では、経済学とは何なのか。以上のような総体を全て研究対象とするのが経済学だといってよいが、あまりに対象が大きすぎて立ち向かうことが困難だ。そこで、経済学ではそれを学の体系として、組織的に行う。

つまり、この市場経済、あるいは資本主義経済と呼ばれる総体を、理論的・歴史的・現状分析的という三つのアプローチから研究するという方法をとる。何か難しそうなことをいっているように思われがちだが、そんなことはない。何か具体的な社会的現象を把握しようと思えば、それを、まず第一に理論的に考え、そして第二に歴史的に捉え、そして、それらを前提として第三に現状そのものを理解する、という方法を採用することはそんなに際だったことではなからう。

たとえば、どうして貨幣があるのか、株価や為替レートはどのように決まるのか、IT革命と呼ばれるものは本当に革命なのか、不況はどうして起こりいつまで続くのか、日本の年金は大丈夫か、あるいは世界的な人口爆発と先進国の出生率の低下はなぜ起こるのか、途上国の飢餓と先進国の肥満は…。こういった諸問題も、先のような枠組みで考えようというわけである。

ウーん、なるほど、とあって頂ければ幸いだ。反対に、経済学嫌いになったというのなら、あまりに悲しい…。

（『宮城学院によろこそ』2005年、より）